

作家と語る現代トルコ文学 オヤ・バイダルとその作品 (シンポジウム報告)

著者	大島 史
権利	Copyrights 日本貿易振興機構(ジェトロ)アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	現代の中東
巻	37
ページ	32-41
発行年	2004-07
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00005778

作家と語る現代トルコ文学

—オヤ・バイダルとその作品—

大島 史

去る2003年12月6日、東京外国語大学において同大学のトルコ語専攻主催による「トルコ現代文学シンポジウム」が開かれた。使用言語がトルコ語のみという、国内初の試みとなったシンポジウムには、詩人ヒルミ・ヤヴズ氏、小説家ラティフェ・テキン氏、同オヤ・バイダル氏という現代トルコを代表する3人の作家が招待され（小説家2人は女性）、日本各地から90名を超える参加者が集まった。シンポジウムでは、

午前中にトルコ文学の現状や日本におけるトルコ文学の研究実績に関する報告が行なわれ、午後からは3人の作家の講演と、学生によるそれぞれの作品の紹介が行なわれた。シンポジウムのプログラムは別掲囲みのとおりである。

筆者が紹介したオヤ・バイダル氏（1941年イスタンブル生まれ）は、1960年代から社会主義運動に身を投じ、80年9月12日の軍事クーデターで国を追われ、12年もの歳月をヨーロッパで

「トルコ現代文学」シンポジウムのプログラム

- | | |
|-----------------------------------|--|
| ■ 近代日本文学覚書——小説を語るに際して | イナン・オネル（東京外国語大学非常勤講師） |
| ■ 日本におけるトルコ文学研究 | 伊藤寛了（東京外国語大学大学院博士後期課程） |
| ■ 文学研究における全集編纂の重要性 | 新井政美（東京外国語大学外国語学部教授） |
| ■ 近代トルコ文学における小説と詩の概観 | バフリエ・チェリ（東京外国語大学外国語学部客員助教授） |
| ■ 講演 | ヒルミ・ヤヴズ（詩人・ピルケント大学文学部教授） |
| ■ 過去と未来の間の途切れた環をつなぐ作家：
ヒルミ・ヤヴズ | ディーテム・ブユックアルマン
（ユルドゥズ工科大学文学部トルコ文学科博士課程） |
| ■ オヤ・バイダルとその作品 | 大島 史（東京外国語大学博士前期課程） |
| ■ 講演 | オヤ・バイダル（作家） |
| ■ 講演 | ラティフェ・テキン（作家） |
| ■ ラティフェ・テキン紹介 | 櫻川知子（東京外国語大学外国語学部トルコ語専攻4年） |

（所属は2003年12月現在）

1991年：『さよならアリオージャ』(Elveda Ayoşa)
(サイト・ファーイク・オイキュ賞)

1993年：『猫の手紙』(Kedi Mektupları)
(ユヌス・ナーディ小説賞)

1998年：『どこにも帰れない』(Hiçbiryere Dönüş)

2001年：『熱い灰が残った』(Sıcak Külleri Kaldı)
(オルハン・ケマル小説賞)

政治難民として過ごしたという、小説家としては一風変わった経歴をもつ女性である。氏はイスタンブール大学社会学部で学び、労働史の研究者としても名を馳せていた。1968年に氏が提出した博士論文「トルコにおける労働者階級の誕生」が、イスタンブール大学教授会によって拒否されたことを発端に、トルコ各地で大学占拠事件が起きたことを考えれば、日本の学園紛争を知る世代は氏の小説の背景を容易に想像しうるであろう。氏はベルリンの壁崩壊後に執筆活動を始め、10年の間に数々の文学賞を受賞している。代表作は上掲の4作である。

1960年代から80年にかけてのトルコの政治は激動の時代であった。学生運動、労働運動の活発化と左右の対立の激化、それに対して3度の軍事介入が起きた。とりわけ1980年の軍事クーデターでは徹底的な社会主義者の粛清が行なわれた。その時代の証人となったバイダル氏の小説は、激動の時代を生きた人間の姿を描くとともに、トルコの現代政治の内部を鋭くえぐっている。ここでは氏の作品の解説と、事前に氏と行なったインタビューを紹介させていただきたい。筆者は文学の専門家ではないが、日本ではあまり注目されることのなかったトルコの現代文学と政治の関わりを、少しでも明らかにすることができればと思う。

作品解説

代表作のなかで『さよならアリオージャ』と『どこにも帰れない』はオイキュ (öykü) というジャンルに分類される。オイキュというのは、英語ではショート・ストーリーとの訳語が当てられるものの、日本文学の短編とは少し趣が異なる。トルコ語では「詩の姉妹」と形容されるように、トルコ人の感覚としてはオイキュは小説よりは詩に近いのである。それに対し『猫の手紙』と『熱い灰が残った』は長編小説である。氏の文章に共通して言えることは文体が非常に簡潔で読みやすいことである。一文一文は長くなく、しかし言葉の一つ一つはとても美しい。情景描写は的確で容易にその風景を思い浮かべることができる。誰もが知っている言葉で誰にも書けない文章を書く、それが数多く生まれる小説のなかから氏の作品が一連の文学賞を獲得する理由であろう。

『さよならアリオージャ』はオイキュで構成された氏の作家デビュー作である。アリオージャというのはロシア人の名前の愛称であることから、この題名は社会主義の終焉も暗喩していると思われる。また氏の好きな作家であるドストエフスキーの名作「カラマーゾフの兄弟」の三男の名前もアリオージャである。

『どこにも帰れない』は帰郷の話である。氏は1980年9月のクーデターから12年間、祖国に帰ることができなかった。この作品には亡命生活のなかで感じたであろう望郷の思い、悲しみ、絶望が語られている。そこで描写されるイスタンブールの風景は、まるで絵葉書を見ているようで本当に美しい。氏がどれほどイスタンブールが

懐かしかったかが真摯に伝わってくるのである。またこの小説の題名には、人間も社会も古い体制には戻れないという意味も込められている。氏は社会主義が崩壊したことによって、深い絶望と悲しみに沈むと同時に自身への怒りや疑問など混乱のなかにいた。社会主義ユートピアの実現はもはや不可能となり、もうどこにも戻る場所がないことを悟ったのである。そして過ぎ去ってしまったことは元には戻らないことを知ったのである。

『猫の手紙』はその名のとおり、猫同士がやり取りする手紙をモチーフに猫の視点から人間の社会を描いた小説である。猫は飼い主の手紙や、洋服、鞆に匂いをつけることによって手紙を書く。飼い主に手紙や客人が来れば匂いを嗅いで猫の友人からの手紙を読むことができる。氏の描く個性豊かな猫たちに思わず微笑んでしまう場面も多くあるが、この小説の本来のテーマは非常に重く深い。猫の飼い主たちは皆んなヨーロッパで政治難民として暮らしている。悩み苦しむ飼い主の姿を不思議に思った猫たちは「人間の秘密調査計画」を立て、情報交換しながら真実に迫る。最後に猫たちが達した結論は「人間の社会には統治する者と統治されるものがある。統治する者は民衆が自分たちに服従し、自分たちの定めたルールに従い、自分たちの要求するとおりに考えることを望む。しかし飼い主の秘密は“服従を拒んだ”ことではないか」という事実である。

小説では希望を失い悲しみのどん底にいる人間の姿の他に、政治難民たちが亡命先で受けた差別も描かれている。「汚い外人め。働きもしないで俺たちの払った税金で酒を飲んでぶらぶらしているだけじゃないか。ヒットラーが生き

ていたらどんな目に遭ったことか」という言葉は、ヨーロッパの一部にある外国人への感情を集約したものであり、自由の国ヨーロッパの抱える矛盾である。こうした深刻なテーマが猫の視点から語られることによって、小説はやわらかいイメージになるが、一方そこに描かれる人間社会は客観性を帯びることになる。「動物のなかで同族同士を殺しあうのは人間だけである、それどころか人間は自分すら殺してしまう、なぜ人間は生きることを意味を問うのか、自由とは何であろうか」。私たち人間が当たり前としてきた事実、疑問は猫にとっては非常に滑稽に映るのである。

『熱い灰が残った』は筆者が最も気に入った長編小説である。主人公ウルキュ・オズテュルクは西欧的なケマリストの家庭に育った社会主義者であり、情熱的で奔放で魅力的な女性である。ウルキュはバイダル氏の世代、「68年世代」の象徴でもある。物語はウルキュの昔の恋人アルン・ムラットがパリで暗殺された場面から始まり、過去を回想する形で1960年代から現在までの政治的事件をからませて語られる。ウルキュはアルンの家庭に家庭教師として派遣され、そこで彼と恋人関係になるものの、階級の違いからアルンの母親に交際を反対される。その後ウルキュは社会主義者のオメル・ウラシュと結婚し政治活動を続けるが、1980年クーデターでパリに逃れる。一方アルンは外交官として高級国家官僚の道を歩む。

このウルキュとアルンはまったく別のグループを象徴している。1960年代、多くの若者がウルキュのように政治活動に参加し、社会主義思想に傾斜していったのに対し、アルンはまったく政治運動に染まっていない。両親の決めた進

路どおりエリート官僚として国家機構に入っていくのである。ふたりが別の道を歩み始めてから25年後、パリで新聞記者として働いていたウルキュは、パリで開かれたトルコの政治問題に関するシンポジウムでトルコ政府の代表者として招かれたアルンに出会う。アルンはその席で予定されていた演説をせず、体制の批判を口にする。そのときウルキュは彼に対してこうつぶやく。「あなたはヒロシマで何も見ていない」。つまり政治活動とは一線を画し、国家機関のなかに取り込まれていった人間がどれほど体制を批判しようとも、政治活動に身を投じ、弾圧を受けた人々の痛みはわからないし、物ごとの本質も見えないのである。本の題名『熱い灰が残った』は、ヒロシマですべてが焼き尽くされた

ように、社会主義の崩壊によってすべてを失った氏の状況を暗喩しているのだろう。

この小説には他にも重要な人物が登場し、現代トルコの抱える問題を描いている。ウルキュの大学の友人で、東部出身のメフメット・イリチはおそらくクルド系と思われ、イスタンブルのゲジェコンドウ（一夜で建てられた掘立小屋の意。たいていは地方出身者が国有地を不法占拠した貧困地区である）に住んでいる。彼も過激な社会主義運動家であったが、時代が移り彼の息子の時代になると、社会主義ユートピアはもはや現実味を失っていた。古い考えに固執する父親に反発する息子はトルコ・ナショナリストの思想に傾斜する。あくまでも脇役であるが、この親子のなかにもトルコ社会の縮図、アイデンティ



左からバフリエ・チェリ、オヤ・バイダル、ヒルミ・ヤヴズ、ラティフェ・テキン

ティの問題をみることができるのである。またウルキュの夫オメル・ウラシュ、アルンの幼なじみジェム等いずれも社会主義者である。後に彼らは社会主義崩壊についての論争をしている。この作品は他の3作に比べより深く社会主義崩壊の論争が描かれているのも特徴であろう。

作品の背景と意義

小説のなかに描かれる主人公たちは氏の人生を反映しているようだが、主人公と自身を重ね合わせて見られることは氏が最も嫌うことである。もちろんこれらの小説はある程度の実体験に基づいているだろう。しかし登場人物は著者本人ではない。氏によれば彼らはあくまでもフィクションであり「象徴」である。主人公の悲しみ、苦しみ、怒り、絶望を描けるのは氏が人間を深く理解しているからである。登場人物を実在の人物のように感じるのであれば、それは氏の人間観察眼によって登場人物が独自のキャラクターを与えられ一人歩きを始めた証拠である。おそらくこれは優秀な文学作品のみがもつ特質であろう。

またどの作品でも「喪失感」が一つのテーマになっている。愛する人を失ったとき、夢破れたとき、生きることの意味を見失ったとき、人間を感じるであろう喪失感がどの作品にも溢れている。しかし人には再生する力がある。氏が最後に描くのは絶望の淵から新たな一步を踏み出す人々の姿である。失われたものは二度と元には戻らないが、人にはそこから何かを学びとり未来へ歩いていく力があるのである。

氏の小説は背景が政治と深く関わるため、政治小説のジャンルに分類する見方も決して少なくはない。筆者は文学の専門ではないので、氏の小説を政治ジャンルに分類すべきか、という問題には触れない。ただ氏は1960年代から現代までの激動の時代を生きた作家であり、これが限りなく事実に基づいた小説であることは明らかである。

現在のトルコの政治的枠組みは、1980年クーデターによっておおむね形成されたと言えるだろう。1980年体制が押さえつけようとしたクルド運動やイスラーム運動は、80年代後半以降さらに勢力を増し問題の根をより深くした。またこのクーデターによって、多くの左派知識人が投獄されたり国を追われたりした。これは現代トルコにとって大きな知的財産の喪失となった。クーデターから20年以上過ぎた今、トルコでは1980年クーデターを再評価する議論が政治の左右を問わず多く出てきている。氏のようにクーデターで海外に逃れた人々がトルコに帰国し、時代の生き証人としてさまざまな形で当時の体験を告白する。そうした体験談が1980年クーデターの研究にどのように役に立つかはなんとも言えない。しかし1960年以降のトルコにおける政治的展開、とりわけ左派が受けてきた弾圧などが明らかにされるにつれ、80年クーデターの再評価に与える影響も大きいのではないか。文学作品が政治研究の資料として利用可能かどうかはともかく、氏の一連の作品は少なくとも筆者がもつ1980年クーデターのイメージに新しい側面を追加した。そして氏の作品が深く人間の心を揺さぶる優れた文学であることは間違いない。

オヤ・バイダル氏へのインタビュー

大島史 (FO) 全作品をとっても興味深く読み終えました。個人的には『熱い灰が残った』がいちばん読み応えがあり好きです。作品からはあなたが左派の思想をおもちで、そうしたあなたの人生がウルキュに反映されているように思われます。ウルキュは『熱い灰が残った』の主人公で、ケマリストの家庭で育った情熱的な社会主義者の女性です。彼女は1980年クーデター後フランスで生活しています。この小説は時系列的流れで語られるのではなく、事件の最後から、つまりウルキュの昔の恋人アルン・ムラットがパリで殺された日から始まり、過去を回想する形で進められていきます。ウルキュの人生を振り返りながら1960年代から今日までの時代が政治的な事件とともに語られていきますが、小説の全体的な背景を理解するために、あなたの経歴を教えてくださいませんか。

オヤ・バイダル (OB) まず小説の登場人物を私と重ね合わせてはいけません。彼らはあくまでフィクションです。私はウルキュではないし『猫の手紙』の登場人物の誰かでもありません。私は西欧式の教育を受け、世俗的な家庭環境で育ちました。母はウルキュのお母さんのようなタイプの人でした。父はフランス文化のなかで育った西欧的な現代人でした。完全なケマリストとも言えません。

FO どのような宗教観をおもちなのでしょう。『猫の手紙』の一節で「私は敬虔であった。世界を眺めてみた。人間がこれほど苦しむことをお許しになる神を捨てた」という言葉が印象

に残っています。高校生のときにお書きになった『アッラーは子供たちをお忘れになった』という小説も少なからず反宗教的な作品ではないかと思われるのですが。

OB 私の家庭で宗教は問題ではありませんでした。父は無神論に近かったと思います。私はカトリック系の学校で学びましたが、ずっと無神論者です。

FO 左派思想にはいつごろ関わるようになったのですか。

OB 左派思想とは1959年、18歳の頃短期滞在したパリで出会いました。1960年以降左派思想はトルコでも急速に拡がり、多くの若者や知識人の間で最も大きな勢力となりました。最初の社会主義政党は1960年代の初めに設立され、私も64年にトルコ労働者党に入党しました。その後はずっと社会主義系の政党に、最後にはトルコ共産党に所属していました。

FO あなたは1980年クーデター後西ドイツに逃れたそうですが、もし差し支えなければ9月12日に何が起きたか、なぜトルコから逃れなければならなかったかを話していただけませんか。

OB 私は1980年9月12日から92年5月までドイツ連邦(西ドイツ)のフランクフルトで生活しました。でも毎月のように政治的な理由で東ドイツや東ベルリン、ライプニッツを行き来していました。つまり両側の人間をよく知っています。私はたまたま1980年9月8日、党大会に参加するため3日間の予定でトルコを出国していたのです。9月12日の軍事クーデターが起きたときには東ベルリンにいました。その日家宅捜査が行なわれ、当局が私と夫の行方を追っていること、母とそこに預けてきた9カ月にな

る息子を連行して脅迫したことを知りました。偶然私は国外にいましたが、もしそうでなくても亡命しなければならなかったでしょう。なぜなら私と夫は新聞に書いた論説記事を理由に20年から36年の禁固刑を求刑されていたからです。また当局は私をトルコ共産党の幹部職員だと疑っていたようです。これは違います。私は名前がちょっと知られたライターにすぎませんでした。でもその後写真入りの指名手配書が出されました。私は1971年のクーデターの際にも拷問を受け投獄されています。もう二度とあんな目には遭いたくなかったのです。もちろん政治難民として生活するのも大変でしたが。ヨーロッパでは軍事政権転覆のために何かできることがあるだろうと思いました。その後国外に脱出した夫と息子に再会し12年におよぶ亡命生活を送りました。

FO ドイツではどのような活動をされていたのですか。

OB 軍事政権に対してできるかぎりのことをしました。執筆をしたり、軍事政権の実態を説明しヨーロッパ社会が彼らを支持しないように活動したり、ドイツで生活しているトルコ人労働者を組織したりです。

FO 『猫の手紙』はとても面白かったです。猫たちがとてもかわいらしく、特徴がよく描かれていました。本当に猫は人間の言葉がわかっているように思えることがあります。この小説を読んですぐに日本の作家、夏目漱石の『吾輩は猫である』が思い浮かんだのですが、漱石はお読みになったことはありますか。漱石の小説でも19世紀の終わり、西欧化によって急速に変化する日本社会の様子と人間の姿が、猫の視点から滑稽に描かれています。日本ではとても

有名な作品で各国語に翻訳されています。そもそも小説を猫の視点から書こうという発想はどこから浮かんだのですか。

OB 夏目の小説は残念ながら読んでいません。猫の視点で小説を書こうと思ったきっかけはこうです。ドイツで政治難民として暮らしているとき、私たちと同じく政治難民として暮らしていた友人たちがみんな猫を飼っていることに気づいたのです。互いを行き来するときによく猫も一緒に連れていっていたので、しだいに猫同士も知り合いになりました。人間の状況を彼らの視点で語ったら面白いなと思いついたのです。猫がとても好きということもあります。当時はとても閉塞した状況にありました。書いているときは楽しかったけれど。

FO 好きな作家は誰ですか。作品に影響を与えた作家はいますか。作品を読んでいてどこか別の小説で読んだ覚えのある引用などがあったものですか。

OB 好きな作家というよりは好きな作品があります。一番は引用にもよく用いた『星の王子様』です。あとはリルケの『マルテの手記』、ドストエフスキー、スタインベック、キャサリン・メンズフィールド、ヴァージニア・ウルフ、トルコではサイト・ファーイク、ビルゲ・カラスなどです。

FO 子供の頃から作家になりたいと思っていたのですか。高校時代『アッラーは子供たちをお忘れになった』という小説を書いて退学処分になったとか。その後は社会学を学んで文学からは離れていたようですね。学校の名前がフランス語ですが教育はトルコでお受けになったんですね。

OB 子供の頃から作家になりたいと思って

いました。ノートル・ダム・ドゥ・シオン女子高はイスタンブルにあります。私はトルコ育ちですが、学校はカトリック系でした。トルコの学校の宗教教育を受けたくなかったのです。でも私が17歳のときに小説を書いたら、修道女たちが「こんな小娘がいったいどうやって小説を書くのだ」と言い退学処分が出されたのです。教育省はその問題をすぐには取り上げず承知で処分を先延ばしにしてくれたので、その間に私は卒業できました。その後『戦争の時代、希望の時代』という小説を書いたのですが、1962年から92年まではまったく文学活動には関わっていません。その時代はずっと社会主義運動に関わっていました。二つの新聞で論説委員を務めました。これは政治的な読み物です。当時私は、社会主義は一つの生活形式であると考え、積極的に党活動をしていけばそれ以外のことにまったく時間が割けないし、いちばん重要なのは人間が分裂しないことであると考えていました。

FO 作品では社会主義の崩壊というのも重要なテーマの一つですが、社会主義をどのように定義されますか。社会主義の定義もさまざまなのでお聞きするのですが。

OB 社会主義は時代、国、人によっても定義が異なります。そのとおりです。しかしその本質はユートピアの言明であり、人間が平和のなかに治まり、あらゆる差別が終わり搾取と圧制のない、創造性を自由に発揮でき、自然と調和した、資本と独占が人間性を支配しない世界です。社会主義とはすべてのユートピア、さらには宗教的なユートピアのような人間性の解放の哲学です。

FO 社会主義の崩壊を予測できましたか。

ベルリンの壁崩壊をどのような思いで眺めていたのでしょうか。社会主義崩壊の理由は何だと考えますか。また現在の政治的見解は。

OB 社会主義がこのような形で崩壊しようとはまったく予期していませんでした。ただ1981年に約1年間モスクワに滞在したことがあります。そのときに社会主義の欠点や不備、間違いもはっきりと見ました。理論的には最大の自由をもたらす、人間を統一するはずのシステムのなかで、人間が思想的に自由ではないこと、創造性を自由に発揮できないこと、そこが天国ではないこと、党の支配が人民の意志より優位に立っていることを知りました。しかし社会主義システム自身のなかで解決策を見い出せると思っていました。社会主義システムは非常に重要な役割も果たしていましたが、それらを見ないで帰ってくるわけにもいきませんでした。ベルリンの壁が崩壊したときには本当に自分の内部から揺さぶられました。楽観的な部分もあって、これで社会主義の自由化が始まるとも考えていました。そもそもあの壁は大嫌いでした。人間を壁の中に閉じ込めるということは、その中では何かまずいことがあるということですから。ベルリンの壁が崩れていなかったら文学には戻りませんでした。壁と社会主義システムの崩壊を目の当たりにした時期は、おそらく自殺の入口にいました。書くことで自分を救おうとしたのです。『さよならアリョーシャ』は(自分のなかでいちばん良い作品だと思います)あなたの質問への答えとなるでしょう。

あらためてじっくり考えてみたのですが、次のことが言えると思います。社会主義のユートピアは存在しますし、人間もそのレベルに到達することができると思っています。さまざまな

理由から実現にはいたりませんでしたし、同じやり方では再現は不可能です。マルクス思想の基幹の一つを成す資本主義批判は、資本主義が終焉していないことを見れば的を射ているのではないかと思います。ただマルクス主義がドグマ化(教義化)することには絶対に反対です。マルクス主義は現代を明らかにし未来の計画を立てる偉大な思想ですが、宗教ではありません。遺伝子レベルの情報すら取りされるような情報化の時代を迎えた今日、社会主義を含むすべてのイデオロギーを見直す必要があります。私は、自由主義的で公正で平和な、すべての差別に反対し、人間が抑圧されない、誰かが誰かを、ある民族が他の民族を、ある国が他の国を抑圧し隷属させない、あらゆる差別(男女、民族、宗教など)とは無縁な、自然と調和した世界を夢見しています。

FO 非常に大変な時代を生き抜いてこれたのですね。書くことで自分を救おうとしたとおっしゃられたことには、思わず涙が出そうになりました。『猫の手紙』では生きることの意味がよく話題に上り、また猫の飼い主たちのうち一人が自殺してしまいました、それがあなたの経験から描かれていることがわかりました。私はベルリンの壁が崩れたときまだ小学生でした。世界で何か大きな変化が起きていることはわかりましたが、そもそもなぜ壁が築かれたのかはわかりませんでした。資本主義、社会主義の概念もよくわかりませんでした。私たちの世代にはもはや政治的理想はありません。若者はあまり政治に興味をもたないし、政治に何も期待していません。自分もそうした若者の一人だと思います。でもあなたのお話を聞いて少しはわかった気がします。社会主義の崩壊があな

たにとって人生の意味を失わせてしまうくらい大きなショックであったことが。それが失望であったことが。

ただ社会主義の崩壊は資本主義の勝利を意味するものでもないと思っています。

OB そうです。社会主義の崩壊は資本主義の勝利ではありません。長い人類の歴史のほんの一瞬です。そもそも社会主義と資本主義は理論的には同じ枠組みのなかにあります。重要な思想家や哲学者のなかには1789年のフランスのブルジョワ革命と1917年のボルシェヴィキ革命を同じ普遍的過程の一步だと考える人もいます。私の考えもそれに近いです。将来グローバル化した世界においてさまざまな、しかし社会主義に近い展開、試みが起こるであろうと思っています。

FO その社会主義に近い動きというのはどのようなものなのでしょう。冷戦後、世界のあちこちでマイクロ・ナショナリズムと呼ばれる現象や過激な宗教運動が起きています。誰もが自分の民族、宗教の正統性を主張します。こうしたマイクロ・ナショナリズムや宗教的過激派の思想はしばしば排外主義に転じ、人を殺すことすらためらわなくなります。トルコもクルド問題を抱えていますね。世界規模で出口のない迷路に迷い込んだようです。私ももちろんあなたのおっしゃるような平和な世界の実現を願いますが、実際に何の解決策も浮かびません。

OB ユートピアに到達することはできなくても近づくことはできます。私もあなた同様悲観しています。世界はユートピアに近づくどころか遠ざかっていっていると。でもマルクスのある言葉があります、「人類は解決できる問題だけを試される」と。将来世界では独占に対し、

グローバリズムのスーパーパワーが世界を征服するという意味ではなく、各国の結びつき、助け合い、つまり新しいインターナショナリズムの意味で新しい兆候があるでしょう。最近の平和運動や「別の世界の可能性」を唱える人たちの国際フォーラムなどです。まだ小さな灯ではありますが、これらは始動していますし力をつけています。おそらく近年のアメリカの攻撃姿勢もテロを生み出すだけでなく、世界規模での平和と公正を求める力強い流れを生み出すでしょう。

FO 今までうかがったおかげで小説の思想的背景がよりはっきり理解できました。私も将来平和で公正な、人間が抑圧されない、あらゆる差別のない世界が実現することを切に願っています。私たち若い世代が将来に対して責任を負っていることを忘れてはなりません。最後の質問とさせていただきますが、トルコ文学におけるあなたの作品の意義は何ですか。日本にはあまりこのような種類の政治小説はありません。文学は政治とどのように関わるべきなのでしょう。

OB その質問に私が答えるのは難しいです。ただ私に言えることは、自分はベストセラー作

家ではありません。でも私の作品は多く版を重ねています。『熱い灰が残った』は12版めです。トルコで最も価値があると言われるサイト・ファイク・オイキュ賞とオルハン・ケマル小説賞、ユヌス・ナーディ小説賞ももらっています。ただ広告で宣伝されるタイプの作家ではありませんし、絶対にそうはなりたくありません。私の本は、おそらくトルコ語がきちんとしているということから、高校の最高学年や大学の文学関係の授業に用いられています。文学に興味があり、政治にも関心をもつ一定の読者層がいるわけです。私の作品の重要性は、歴史の最も古典的で厳しい時代の人々を、トルコに限らず社会—政治的展開のなかで描いていることでしょうか。

FO さまざまな質問に答えてくださって、感謝の意を述べるとともに新しい作品の執筆も心から楽しみにしています。

(このインタビューは、2003年10月から11月にかけて、筆者とオヤ・バイダル氏のメールのやり取りによって実現したものである。最終的に筆者が加筆しまとめたものを氏に承諾を取った上でシンポジウムの配付資料に掲載した)

(おおしま・ふみ／東京外国語大学大学院
地域文化研究科博士後期課程)